ヤクビンスキー・バフチン・ヴィゴツキーの論にみるモノローグ・ダイアローグ概念の展開：社会集団の斉一性と人格の独自性とをめぐって

田　島　充　士
東京外国語大学

Monologue and Dialogue in the theses of Jakubinskij, Bakhtin and Vygotsky: On the uniformity of social groups and the uniqueness of personalities

Atsushi TAJIMA
Tokyo University of Foreign Studies

Abstract

Monologue and dialogue, concepts that were developed by L.P. Jakubinskij in the context of Soviet linguistics during the 1920s, were cited in the works of M.M. Bakhtin and L.S. Vygotsky. This study investigated Bakhtin's and Vygotsky's interpretations of these concepts, paying particular attentions to the analysis of relationships between the uniformity of social groups and the uniqueness of personalities. In summary, social groups emerge from the images of fellowship held by each personality, and the uniformity of such groups corresponds to the communicative practices of individuals, each of whom has unique ideas. Specifically, Vygotsky's thesis presents a developmental model of personality that addresses the transition from mastering adult speech via imitative internalizing (related to the uniformity of social groups) to creatively reconstructing one's own meanings (related to the uniqueness of personalities). The ideal perspectives for research regarding these differences between uniformity and uniqueness in discourse practices were discussed by analyzing Jakubinskij's, Bakhtin's, and Vygotsky's interpretations of monologue and dialogue.

1．はじめに

ロシア・フォルマリズムの旗手の一人でもあった言語学者・ヤクビンスキーの主著「ダイアローグのことばについて」は、ヴィゴツキーおよびバフチンが共に参照したことで知られる文献である（Brandist, 2007; 桑野, 1977; Wertsch, 1985）。そして「ダイアローグ（対話）」および「モノローグ（独話）」とはこの文献の中で、相互交流における発話の交替形式を分類するカテゴリーとして提唱された概念である。その後、バフチンの主要な議論において広く引用され、またヴィゴツキーの議論にも組み込まれているという点で、インパクトの大きな概念といえる。

ヤクビンスキーおよびバフチンの議論に通底するのは、両者ともに、異なる生活世界を背景とする話者が交流を行うために使用する言語構造の検討を行っているということである。この点については、先駆者であるヤクビンスキーの議論が、バフチンの論におよぼした影響は少なからざるものがあると考えられる。またバフチンほど直接的ではないが、ヴィゴツキーの論文においても、そのアイディアは、彼の人間観に反映されていると思われる。

一方、ヤクビンスキーとバフチンは、社会集団の斉一性と個々の人格の独自性との関係という、微妙なテーマに関わる問題についても論じているが、これに関しては、両者の最終的な結論は相反するものになっている（特に「ダイアローグのことば」以降、スターリンの独裁政権下で発表されたヤクビンスキーの諸論文との比較において）。そしてその展開の独自性は、モノローグ・ダイアローグを巡る、それぞれの論者の独自の解釈に現れていると思われる。さらにヴィゴツキーは、ヤクビンスキーのモノローグ・ダイアローグ論を、話しことば・書きことばの分析に適用しつつも、独自の人格的意識

（内言）の成長モデルを提唱していると考えられる。

そこで本論においては、ヤクビンスキー、バフチンおよびヴィゴツキーの論におけるモノローグ・ダイアローグ概念の展開について検討を行い、社会集団の斉一性と成員個々の人格の独自性との関係について考察を深める。その上で、社会実践を実証的に検証するための、妥当な分析的視座の提案を行う。

なお人格とは幅広い解釈を許容する概念であるが、本論においては「人々がそれぞれの人生を生きる中で形成してきた内的な文脈・視点」と意味づけ、各論における分析に用いる。また本論で引用したヤクビンスキー・バフチン・ヴィゴツキーの主著については、各訳本の記述にもとづき出版年を記す。

2．ヤクビンスキーの論におけるモノローグ・ダイアローグ

本節では主に、ヤクビンスキーの主著「ダイアローグのことばについて(1923)」を分析対象とし、バフチンおよびヴィゴツキーの議論への影響が大きいと思われる箇所を中心に取り上げ、モノローグ・ダイアローグ概念の主要な展開について分析を行う。

2.1. 相互交流における空間的リソースとモノローグ・ダイアローグ

ヤクビンスキーは、社会に流布する言語的多様性を生み出す要因の特定を目指し、話し手と聞き手との間で展開される相互交流において使用される言語の形態に注目する。そして、話し手と聞き手が実際に対面する相互交流の形態（「直接的形式」と呼んだ）もしくは対面しない形態（「間接的形式」と呼んだ）の違いにより、すなわち相互交流の文脈となる、いわば空間的リソースの共有を話者間で期待できるか否かの違いにより、それらの交流を支える言語構成が大きく変わると論じる(Jakubinskij, 2004, pp. 393-394, pp.395-400)。

まず直接的形式では聞き手は、話し手が発することばだけではなく、彼が指し示す具体的な対象物の認知情報を意味交換のリソースとして利用できる。さらに聞き手は話し手が発する、彼の身振り、表情や声のトーンなどを組み合わせた視聴覚情報もリソースとして認知し、相手の意図を見出すことも可能である(Jakubinskij, 2004, pp.396-397)。

オペラグラスで舞台をみたほうがよくみえるだけではなく、よく聞けるようになり、また理解できる。それは、身振りおよびジェスチャーを目で追うことができれば、何が起こっているのかをよりよくみて、認識することができるからである。・・・子どもが母親に話しかけ、またその答えを待つとき、彼はたびたび、両手で母親の顔の向きを変える。(Jakubinskij, 2004, pp.397)

この種の交流においては、話者らが共有すると考えられる空間的リソースに関わる情報は言語化されない傾向にある。その結果、表現される意志情報に関する言語への依存度が低くなり、その構成もシンプルになる。家族や親しい友人が対面して話しあう交流が、その典型とされる。

裏を返せば、異なる場所・時間に位置する聞き手との、空間的リソースの共有がなされない間接的形式の交流では、話し手は他のことばによって対象となることばを意味づけるという、より複雑な言語操作をともなう解釈を行わなければならないことになる。自分の意志をすべて文字で伝えなければならない書きことばが、その典型とされる(Jakubinskij, 2004, p.393)。

そしてモノローグ・ダイアローグは、この直接的形式および間接的形式と結びつく概念として導入される（朝妻, 2005）。これらの概念は、話者らがどのようなタイミングでそれぞれの発話を交替するのかを整理したものである。すなわち、話し手と聞き手が交互に比較的短い発話を交わしあう交替の形態が「ダイアローグ形式」、また、特定の話し手が比較的長い発話を続け、聞き手はそれを傾聴し続ける交替の形態が「モノローグ形式」と呼ばれる(Jakubinskij, 2004, p.394)。そしてヤクビンスキーはこのダイアローグ形式を直接的形式の相互交流において優勢な発話の交替形式、またモノローグ形式を間接的形式において優勢な発話の交替形式として取り上げ、分析を進めている。

2.2. 言語的多様性（「社会的方言」）をうみだす統覚の共通性

さらにヤクビンスキーは、以上の空間的リソースに加え、話者らが安定的に記憶する過去経験にもとづく、いわば知識的リソースも同時に重視している。たとえば、特定の話題に関連し、話し手と聞き手が過去経験を共有していると相互に期待できる場合（自覚的であれ非自覚的であれ）、その部分の情報が言語化されなくても、この経験に関する知識をリソースとして、話題の方向が理

解（厳密にいえば推測）されることがある。このような場合、直接的形式の状況と同様に、使用される言語そのものへの依存度は低くなる(Jakubinskij, 2004, pp.413-416)。

ヤクビンスキーは以上のように、①空間的リソースとしての、交流を行っている相手や状況に関する現在進行形の認知にもとづく一時的な記憶および、②知識的リソースとしての、会話のテーマに関する比較的安定した永続的な記憶（Gulida(2010)はこれを①の一時的な記憶と比較し「世界知識」と呼んだ）が聞き手にとって、話し手のことばを理解するための内的文脈として機能し、彼らが見聞きする物事を解釈する上での情報処理の方向を定めるとする(Jakubinskij, 2004, p409)。これらはまた「統覚量」とも総称され、この統覚量にもとづいた話者個々人の情報処理作用は「統覚」と呼ばれる(Jakubinskij, 2004, pp.408-409)。

なお話者間の統覚の共通性への期待は、相互交流が継続する限りにおいて高まる (Jakubinskij, 2004, pp.417-418)。話者らがそれぞれの意志を交わし続けることで、空間的リソースとしての一時的記憶が得られ、さらにその一部が知識的リソース（世界知識）にも転じ、結果として、共通する統覚量が蓄積されていくと相互に期待されるからである。

たとえば、定冠詞のつく特定の名詞（「あの机」「この本」）の使用は、話者らが互いに「何を問題としているのか」という統覚の共通性への相互期待を前提として初めて成立し得る「ほのめかし」である(Jakubinskij, 2004, p.417)。この期待が話者間で高まった結果、表現される言語構成の簡略化はより加速し、それにともない、発話の交替も頻繁に行われるようになる。その結果、この種の交流は「あ・うん」の呼吸で進むようなダイアローグ形式の特徴をより強く帯びるようになる。ヤクビンスキーはこの種の交流事例として、ドストエフスキーの「作家の日記」からの引用を行っている(Jakubinskij, 2004, pp.398-399)。以下、その一部を紹介する（註1）。

一人の若者は、きっぱりと勢いのいい調子でこの名詞を発音して、前に一同が話していたなにものかに対する、思いきり侮辱のこもった否定を表明した。すると、もう一人はその答えに、まったく同じ言葉をくり返したが、今度はもうまるで別な調子で、別な意味を持たせていた・・・こういう次第で、ほかの言葉は一つも口に出さないで、彼らは後から後からと、前後六回続けざまに、このお気に入りの言葉ばかりくり返したのだが、それでもお互いに遺憾なく理解し合った。（ドストエフスキー, 1970, pp.132-133）

そして以上のようなほのめかしを交わし続ける話者の間では、「社会的方言」と呼ぶ、特定の人々の間でのみ通用する特殊な語句・意味を備える言語群が出現することもある(Jakubinskij, 2004, p.417)。つまり、自分たちの間でだけ通用する、特定の言語を共有・維持する（と考える）仲間意識・集団意識が生じ、結果として「社会集団」がこれらの話者の間で立ち現れるということである。

2.3. 異質な文脈を背景とする聞き手に向かうモノローグ

一方、以上のような統覚の共通性が話者間で期待できない場合、自分の意志を明確に聞き手に伝える上で、話題に関する前提知識を省略できず（ほのめかすことができず）、結果的に話し手は、その部分の情報も含めた詳細な言語化を自分ひとりで行わなければならないことになる(Jakubinskij, 2004, pp.424-425)。先述の事例でいえば話し手は、定冠詞の使用だけでは、この種の聞き手に対し自分の意図を伝えることができず、結果として「○○大学の××先生の研究室にある一番大きな机」「△△先生の□□という授業で指定された※※についての本」など、関連情報のすべてを言語化しなければならないということである。

結果としてこの種の交流は、一人の話者が長く発言し続けるモノローグ形式の特徴をより強く帯びることになる。Gulida(2010)は、ヤクビンスキーの整理したこの種の言語的特徴を、時間・空間を隔てた話者同士をつなぐ、相互交流の「遠隔モード」と呼んでいる。

私の生きる環境とは異なる世界に住む人と話す（場合）、・・・相手ができるだけ容易に理解することを目的に、語・語群を選ぶ。例えば、大衆向けの学術冊子などの、書きことばの領域でも、同様の現象がみられる。(Jakubinskij, 2004, pp.424-425)

以上の議論をまとめると、相互交流は大まかに、以下の図のようなモデルに集約することができる。本モデルの①から④への移行は、話し手と聞き手との間の「空間

的リソース」および「知識的リソース」の共通性が低下することを、つまり、相互に期待できる個々人の統覚量（およびその結果としての統覚）の共通性が低下することを意味する。その結果、情報伝達におけることばへの依存度が増し、表現されるべき言語構成が複雑化するため、話し手が一人で話す時間も必然的に長くなる（つまり、モノローグ形式の特徴が加速化する）。

なおヤクビンスキーは、モノローグ・ダイアローグ形式を絶対的な分類ではないとも論じており(Jakubinskij, 2004, pp.394-395)、本モデルの分類も相対的なものとして位置づけられるものである。

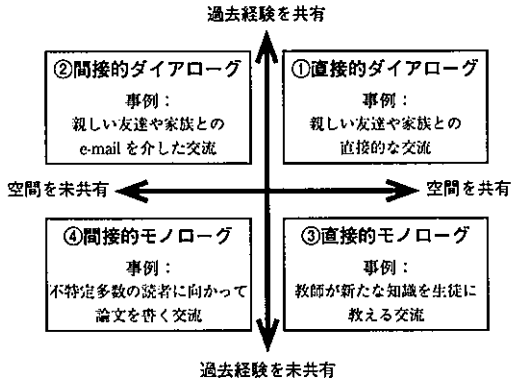

図　空間的・知識的リソースの共有の有無にもとづく交流モデル

2.4. ダイアローグの自然性とモノローグの人工性

またヤクビンスキーは、人間には本来、飛び込んできた刺激に対して何らかの返答を行おうとする「自然な」応答性を持つと捉えており、ダイアローグはこの自然さを反映した発話の交替形式になると指摘する(Jakubinskij, 2004, pp.402-403)。この自然さを象徴する事例として、ヤクビンスキーは、口の中に食べ物が入っている人に話しかけるというエピソードを紹介する。このような場合、彼は、話しかけられた発話に応答しようとする自然傾向にしたがってしまい、むせてほとんど窒息してしまうのだという。

一方、モノローグは、この自然さを抑圧した「人工的」な形式であり、話し手の発言を遮らないマナー、聞き手に静粛さを要求できる話し手の権威性、発言権をコントロールする議長の選出（権力の行使）などの特殊な工夫により、聞き手の応答的発話を抑制することで実現する交流だという(Jakubinskij, 2004, pp.403-404)。たとえば、モノローグ形式による交流の事例としてあげられる講演会（本論の交流モデル③）では、講演者の発言に対する応答としての、聴衆のざわめき声が常に存在するという。聴衆の発話は、あくまでもマナーによる抑止、または静粛さを要求する権力を認められた議長による制止、もしくは発言者の権威性によって人工的に覆い隠されているに過ぎず、それでもなお、聞き手のメモ書きや感嘆の声などにおいて、相手のことばに対して応答する相互交流に向かう人々の自然傾向は潜在し続けるのである。

つまりヤクビンスキーは、たとえ典型的なモノローグ形式による発話であっても、厳密にみれば、話し手の隠れた応答に向かうものとしてみているのである。その意味においては、モノローグとダイアローグとはあくまでも表面的な言語構成の違い（一人の話者の発話が短いか長いか）を説明するに過ぎないものだともいえる。

ただし、情報伝達における言語への依存度が高いモノローグ形式による交流では、ダイアローグ形式によるものと比較し、言語の文章としての完成度が大きな問題となる。字面だけを追えばその意図が理解できるような、完成された文章として自分の意図を言語化しなければ、統覚の共通性が期待できない聞き手に対し、話し手が的確に情報伝達を行うことは困難だからである。そのため、話し手には自分の伝えようとする意志を、その文脈も含めて表現するための、言語に対するより高く明晰で組織的な操作が要求されるようになる(Jakubinskij, 2004, p.407-408)。

つまりモノローグとは、ダイアローグと比較するならば、先天的な自然さの抑制および、複雑な言語操作が求められるという点で、より文化的（人為的な訓練が必要という意味において）な交流形態を示すのだといえる（Gulida, 2010; レオンチェフ, 1980）。この文脈でいうならば学校教育は、モノローグ的交流（書きことばを志向する）を可能にするための、文化的訓練の場として位置づけることも可能だろう。そしてこの自然さを抑圧する代償として、モノローグ的交流を操作する者は、時間的・空間的に異質性の高い話者同士をつなぐことを可能にする組織的な言語意識を得るのである。

2.5. 統覚の共通性の相対化にみる人格の独自性

以上のように、統覚の共通性を軸に、社会と個人との関係を論じたという点で、ヤクビンスキーを、話者間の共有知識の成立の問題に着目した史上初の言語学者とし

て評価する向きもある（Oliviera & Laira, 2012）。

ただしヤクビンスキーは、厳密にいうならば、少なくとも「ダイアローグのことばについて」においては、この統覚の「共通性」を話者間で絶対的に保証されるものとして扱っていない。ヤクビンスキーによれば、話し手が発するあらゆることばは、相互交流に向かう人々の自然傾向を受け、話し手による修正を被る可能性は排除できないという(Jakubinskij, 2004, pp.402-403)。このことを発展的に解釈するならば、客観的（相互交流に参加しない外部の者からも観察可能という意味としての）にみれば、同じ社会的方言を共有し、同じ社会集団に属しているようにみえる話者同士であっても、常に、それぞれの発話の異質な解釈可能性は排除できず、また、統覚の共通性の逸脱可能性も存在し続けるということになる。

実際、ヤクビンスキーは、統覚の共通性への期待が裏切られ、発話の意図が誤って解釈される事例を多く紹介している(Jakubinskij, 2004, pp.419-420)。裏を返すなら、統覚の共通性が完全には一致しないからこそ、新たな言語的交渉の可能性が生まれ、既存の社会的方言も更新されていくのだとも解釈できる。

以上のように統覚の共通性を相対化することで、ヤクビンスキーは婉曲的に、相互交流に向かう話者個々人の、持続的な内的文脈としての人格の独自性を保証しているのだといえる。ヤクビンスキーの議論において統覚量は、あくまでも、現在参与する相互交流の方向性を予想するための、個々の話者が抱く個人的記憶として捉えられている。したがって統覚の共通性もまた、話者が相互に抱く期待に過ぎず、また社会的方言を共有する社会集団も、話者それぞれの人格において個別に表象され、さらに外的な交流の中で交渉され続ける、相互主観的なイメージとして捉えられる。すなわち、実践として客観的に観察可能な社会集団の斉一性とは、個々の人格において内的に期待され、また他の人格との外的な相互交流の中で、その都度交渉される、動的な表象として解釈されるのである（註２）。

2.6. ヤクビンスキー総論（「卑俗社会学主義」が投げかける課題）

ところが上記のような、個人と社会集団との関係についてのしなやかで緊張感に満ちたヤクビンスキーの論は、当時のソ連の強権的な政治状況の影響を受け、急速に硬直化していったとされる。

「ダイアローグのことばについて」を執筆した後、ヤクビンスキーが1920年代後半から30年代前半に発表した複数の論文においては、モノローグ形式の活用によって、現実世界に偏在する言語的多様性は「克服」されるべきであり、社会集団ごとにみられる言語的差違を消去した、一枚岩的言語集団が形成されるべきと論じられているという (Brandist & Lähteenmäki, 2010; Uhlik, 2008)。ヤクビンスキーは、孤立した複数の言語集団をつなぎ得る、モノローグ形式による言説が、これまでブルジョアジーによって独占され、彼らの権益を守るために、プロレタリアートらを抑圧する存在になっていたと主張する。一方、階級闘争を通しこの言説をブルジョアジーから奪い、プロレタリアート自身が使いこなすことにより、既存の社会集団に閉じられた言語の異質性が克服されるのだという。そしてプロレタリアートによる独裁的な支配の下、人々の間に存在する言語的多様性の葛藤を消去した、スムーズでハーモニックな意思疎通を可能とする、統一的言語社会が達成されるのだという。

これらの議論には、「ダイアローグのことばについて」の中で示唆されていた、個人と社会集団との間の緊張関係への考察がすっかり消失しているように思われる。社会集団の存在が実体化され、個人はその集団を構成する、いわば部材の一部として扱われているからである。これらのヤクビンスキーの論に従うならば、統一的な言語社会が訪れた後は、その社会集団のメンバーが使用する言語に対する個人の意識のズレは、権力者集団のモノローグの一枚岩性を脅かす要因として、存在してはならない異物になってしまう。Brandist & Lähteenmäki(2010)は、この時期のヤクビンスキーの言語論を評したヴィノグラードフの「卑俗社会学主義」ということばを紹介している。

これは恐怖と戦慄の言語学である。これらの論文が発表された数年後に、スターリン独裁政権下で多くの人々の命が奪われた「大粛清」が開始された歴史的事実に鑑みれば、その恐怖と戦慄は、よりリアルな感覚として、受け止められるだろう。1930年代以降、ヤクビンスキーは「好ましからざる人物」としてみなされてきたとされるが(Knox, 1979)、長きにわたり、西側の研究者の間でその存在がほとんど知られてこなかったのも、以上のような事情が影響しているのかもしれない。

3. バフチンの論におけるモノローグ・ダイアローグ

バフチンは、彼の主要概念の展開において、ヤクビン

スキーの議論の影響を相当程度、受けていたと指摘される（桑野, 1977; Wertsch, 1985）。バフチン・サークルの主要なメンバーの一人であったヴォロシノフが、ヤクビンスキーの務める研究所で研究指導を受けており、両者の議論の接触可能性が高かったことは、その影響の一要因としてあげられる(Alpatov, 2004)。しかしモノローグ・ダイアローグ概念については、ヤクビンスキーの論を直接的に継承したと考えられる箇所と、バフチン独自の意味が与えられている箇所が、著作によって（また同じ著作の中においても）混在している。そしてこの、バフチン独自の両概念の解釈変更は、現代的視点からみれば、ヤクビンスキーが陥った、いわば、卑俗社会学主義化を回避するための理論装置として機能するものと解釈できる。本節では、前節までの議論をもとに、このバフチン論におけるモノローグ・ダイアローグの独自の展開について検証する。

3.1. 生活のことば・詩のことばとモノローグ・ダイアローグ

社会実践と言語交流との関係を説いたバフチンの著作（特にヴォロシノフ名義で出版されたもの）には、ヤクビンスキーからの影響を色濃く感じさせる記述が多い(Alpatov, 2004)（註3）。

たとえばバフチン（ヴォロシノフ）は「生活のことばと詩のことば(1926)」において、同じ社会空間で生活実践を共有する話者間においては、わずかな言表を使用するだけで意味交換が可能になると指摘している。

二人の人間が部屋の内に座っている。二人は沈黙している。一人が「Tak（タ－ク）」という。もう一人は何も答えない。この会話が行われたときに部屋にいなかった私たちにとっては、この〈会話〉のすべては、全く理解できない。孤立させられた言表「タ－ク」は、空疎で無意味である。だが、それにもかかわらず、二人の独特な会話・・は、意味と意義に満ちており、完璧なものである。（バフチン, 1979, p.226）

以上のようなやりとりが成立するためには、（1）会話を行う人々にとって共通な空間的視野、（2）状況の、両者に共通する知識と理解、（3）この状況の共通の評価、という条件が必要になるのだという（バフチン、1979, p.227）。このうち条件（1）は本論でいう空間的リソースの共有を、また（2）は知識的リソースの共有を、そして（3）は（1）（2）が作動した結果、話者らの統覚の共通性が高まることを意味すると解釈できる。以上の条件が作動する場合、人々は「合言葉」と呼ぶ、極端に簡略化されたことばによっても意思疎通が成立するのだという。バフチン（ヴォロシノフ）は、このような日常生活の中で交わされる言語交流を「生活のことば」と総称する。

一方、文学作品のような、話者が言表の中にすべての意志を詰め込もうとする言語交流の存在も指摘され、これは「詩（芸術）のことば」と呼ばれる。この種の言説が詩のことばと呼ばれた理由は、「文学の言葉、詩の言葉は、生活における言葉と違い、作家と読者が同一時空を共有せず、読者はふつう未知の人であるから、対象を読者に見せるように状況を再現しながら、それについての話を展開するような形にしなければならない」（磯谷, 1979, pp. 270-271）からである。

ここでいう「生活のことばと詩のことば」は、ヤクビンスキーの「モノローグ形式とダイアローグ形式」と響き合う概念として捉えられる (Alpatov, 2004)。前節の交流モデルでいえば、おおよそ①②に当たるダイアローグ性の強い言語交流に該当するのが生活のことば、③④にあたるモノローグ性の強い言語交流に該当するのが詩（芸術）のことばとして解釈可能であろう。

さらに「マルクス主義と言語哲学(1929)」および「芸術のことばの文体論(1930)」では、バフチン（ヴォロシノフ）は、より直接的に、ヤクビンスキーの「ダイアローグのことばについて」の引用符を示している。そして現実の言語交流においては、話し手が一人で長々と発話を続けるモノローグであっても、ダイアローグと同様に、聞き手からの応答を待つ存在であり、両者の違いは、あくまでも表面的なものであると説明している（バフチン, 2002, p.144）。つまり詩のことばのような言語（「モノローグ」）であっても、それらは実際には他者の応答へと向けられたことばなのであり、さらに、他者からの問いかけに対して応答を行おうとする「自然」傾向にもとづく相互交流行為としての「ダイアローグ」の一部であるとする論を展開する。

バフチン（ヴォロシノフ）による、これらのモノローグ・ダイアローグの展開は、用語使用の若干の違いがあるものの、ほぼ、ヤクビンスキーの議論と並列の関係にあるのだといえる。

3.2. ポリフォニー小説論にみるバフチン独自のモノローグ・ダイアローグ

一方、バフチン自身の名義により出版された、特に小説を分析対象とした著作においては、ヤクビンスキーによる解釈とは大きく異なる、彼独自のモノローグ・ダイアローグ論の展開がみられる。そして現代的視点からみれば、バフチンはその独自の解釈を通し、ヤクビンスキーが捨て去った、社会集団の斉一性と成員個々の人格の独自性との間にみられる緊張関係を描き出そうとしたのではないかと考えられる。本節では、「ドストエフスキーの創作の問題(1929)」「ドストエフスキー論の改稿によせて(1977)」「ドストエフスキーの詩学(1963)」「小説の言葉(1975)」を中心に取り上げ、その独自の展開について掘り下げてみていく。

3.2.1. 小説におけるポリフォニーとホモフォニー

小説とは、登場人物たちの相互交流を軸に物語が展開していく、文学作品（書きことば）である。バフチンはこの小説を軸に、話し手と聞き手の人格が発する思想・観念（「イデー」とも呼ばれる（バフチン，2013））をめぐる闘争的関係を論じている（桑野, 2011）。その際に使用された分析概念が、「ポリフォニー」および「ホモフォニー」である。

ポリフォニーとは、本来、従属関係のない複数の声部からなり、それぞれが独立しながら展開していく様式の音楽を示す概念である。一方のホモフォニーは、特定の一声部だけが主旋律となり、他の声部はそれを支え従属する働きしかしない様式の音楽を示す（「百科事典マイペディア」より）。バフチンはこれらの概念を援用し、登場人物らを、他者によって規定され尽くされ得ない人格を持つものとして扱い、人格同士が独自の思想をもって衝突する相互交流の総体（註4）として作家が展開する小説を「ポリフォニー小説」と呼んだ。

彼ら（著者註：小説の登場人物たち）はみな、他者の口にのぼる自分の人格の定義に対して、やっきとなって闘っているのである。彼らはすべて自己の内部の不完結性を感じ取り、自分を外見だけで決めつけようとするあらゆる定義を内側から突き破って、それを虚偽としてしまうような自己の可能性を感じているのである。（バフチン, 1995, pp.121-122）

ポリフォニー小説は、この登場人物らの人格の「内的な不完結性」を特に尊重したテクストといえる。その典型とみなされるドストエフスキーの小説においては、人格相互の交流の流れを断ち切って「〇〇は××の罪を確信していた」など、彼らを意のままに動かす、創造主としての作家による心理学的・精神病理学的な解釈はほとんどみられない（幅, 2006）。また登場人物らの人格の視野にないものは作家にもなく、作家のことばはほとんどの場合、彼らの人格どうしの接触を通した創造場面に立ち会うものとして機能している。

ドストエフスキーの作品には、決定的で、完結させ、永久に規定してしまうような言葉は存在しない。したがって、<そのひとは何者なのか>という問いに答える、確固たる主人公像も存在しない。ここにあるのは、<わたしは何者なのか><おまえは何者なのか>という問いだけである。けれども、こうした問いも絶え間ない未完結の内的対話のなかでひびいている。（バフチン, 2013, p.289）

ポリフォニー小説では多くの場合、登場人物らの声がポリフォニー音楽のように響き合い、罵倒し合う、相互交流の総体（バフチンはこれを「出来事」と呼んだ）としてストーリーが展開する。これは、作家が登場人物らを従属させ、彼らがみることのできない舞台装置を読者に提示し、彼らの台詞を出来事の外からコントロールするような、トルストイを典型とするタイプの小説とは大きく異なる点であるという（註5）。

それぞれに独立してたがいに融け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキーの小説の本質的な特徴なのである。（バフチン, 1995, p.15）

その結果、ポリフォニー小説においては、登場人物らの相互交流から独立した、小説全体に対する作家自身のイデーをテクストから直接的に見出すことが、相対的に困難になる。ポリフォニー小説の作家にとって、登場人物らの人格は内的に未完結なものであり、作家は彼らの相互交流の文脈を断ち切る、恣意的なコントロールとしての断定的な解説を行わないからである。またドストエフスキー小説の結末とは、単に人格どうしの相互交流の終わりであり、作家の最終的なイデーが提示される場に

はなっていない（バフチン, 1988b, p.272）。畢竟、読者は独自のイデーを持つ人格としての登場人物らが展開する出来事に自らも参加し、作家の意図を探し求めるしかない（註6）。

無論、読者が特定の登場人物の声を取り上げ、「作家がいいたいのは○○ということだ」等と主張することは可能である。しかし、それはあくまでもその読者自身のイデーなのであり、作家自身の最終的な思想を裏書きする情報は、小説の中には直接的には書かれていないとバフチンは捉える。結果として、ドストエフスキーの小説を読む読者（批評家）の間には「この作家がここで言いたいことは○○ではなく××だ」等の、作家のイデーを巡る論争が比較的容易に生じることになる。Clark & Holquist(1984)は、まさにこのような、読者間の果てなき論争の生じやすさこそ、ドストエフスキー小説のポリフォニー性を証拠づけるものと指摘する。

つまりバフチンは、小説におけるイデーを巡る作家と登場人物との間の関係を明らかにすることで、結果として、静的な文体分析にとどまらず、小説という（モノローグ形式をとる）言語媒体を介した、時空間を異にする作家と読者との、動的な相互交流をも検証の射程に入れていたのだといえる。作家が小説世界の中心に居座ることをやめ、内的に未完結な人格としての登場人物たちの果てなき出来事を読者に示すという形態をとるポリフォニー小説を介することで、作家と読者、そして読者と読者同士もまた、それぞれの人格から発せられるイデーの意味を巡る果てなき相互交流に、比較的容易に、身を置くことが可能になるということである。

3.2.2. ホモフォニー的モノローグ・ポリフォニー的ダイアローグ

バフチン独自のモノローグ・ダイアローグの展開は、この小説におけるポリフォニー・ホモフォニーとの関連から生じるものといえる。すなわち聞き手に対し、彼のイデーを完結したものとして押しつけ、話し手が意図したとおりに聞き手が再生することを要求する（「最後のことば」になることを望む）ホモフォニー的態度がもたらす相互交流としてのモノローグ、および、話し手のイデーを聞き手が引用し、新たなイデーとして発話し直す自由を許容するポリフォニー的態度がもたらす相互交流としてのダイアローグである。実際、バフチン(2013, p.21)は「モノローグ的な（あるいはホモフォニー的な）」とまで注釈している。

モノローグは完結しており、他者の応答に反応することがない。それは応答を期待しないし、そのような応答に決定権を認めようとしない。モノローグは、他者が存在しなくても可能であり、またそれゆえに、一定程度、あらゆる現実を物化する。モノローグは、最後の言葉となることをめざす。それは描写された世界と描写された人間とを閉じられたものとする。（バフチン, 1988b, pp.261-262）

そしてバフチンは、以上のように意味づけたモノローグを、ことばの意味構成に関して、対等な相互交流を阻む権威主義的態度として攻撃した。一方、その対義概念としてのダイアローグを、独立した人格が、互いの思想を引用しながら新たな意味を構築しようとする態度として意味づけ、理想化した。さらに、この二つの対立軸はまた「小説の言葉」において、「権威的なことば」および「内的説得力のあることば」と呼ぶ概念軸にも引き継がれている（桑野, 2011）。

前述のように，ヤクビンスキーにとっての権力とは，モノローグ形式による交流を成立させるため，話し手の発話に対する聞き手の自然的応答を人工的に抑えるという聞き手のマナーを呼び起こすためのものであった。一方，バフチンは権力を，これらの著作においては，聞き手による応答的発話を強制的に禁止し（もしくは無視し），話し手のイデーに従属させようとする作用として解釈したように思われる。

Clark & Holquist(1984)は、以上のようなバフチンの言語論を捉え、「引用の政治学」と呼ぶ、彼らが提唱する概念と関連づける。自分のイデーを引用しようとする聞き手に対して、話し手が、どの程度の改変の「自由」を認めるのかという問題はすなわち、その人物の価値判断をともなう事象であり、政治学として捉えることができるという主張である。人は任意に「暴君として、すなわちまったく独白的に他者と関係することもできるし、民主的に、すなわちポリフォニックに、対話的に、関係することもできる」(Clark & Holquist, 1984, pp.242-243)のであり、その意味でイデーの引用とは、話者の間でうずまく政治的な闘争と深く結びつくのだという。つまりバフチンのいうモノローグとは、相手の人格によるイデーの独自性を認めず（もしくは無視し）、自分のイデーへの従属を求めることで、仲間であることを聞き手に強制的にデモンストレーションさせる、いわば我と汝の社会

集団の斉一性の表象化を相手に強要するような言語的実践の特徴として解釈できるのである。

無論、ここでバフチンが展開しているモノローグ・ダイアローグは、もはや、ヤクビンスキーによるものを超え、他者のイデーの自由な引用を促進しまた阻害する、人々の相互交流に対する価値判断の原理を問うたものになっている。当然、両者の概念は区別して論じられるべきであるが、やっかいなことに、以上の問題を扱ったバフチンの著作においてさえ、バフチン独自の定義によるモノローグ・ダイアローグと、ヤクビンスキーの定義に近似したモノローグ・ダイアローグが混在している。このことは、バフチンのテクストを解読する上での障壁の一つにもなっている。

そこで本論では、バフチンの独自色が強い定義による「モノローグ」を「ホモフォニー的モノローグ」、「ダイアローグ」を「ポリフォニー的ダイアローグ」と呼び、以降の議論では、ヤクビンスキーが提案した定義に近似する「モノローグ・ダイアローグ」とは区別して論じる。

3.2.3. 「小説」という言語意識とポリフォニー的ダイアローグ

Brandist & Lähteenmäki(2010)は、バフチンとヤクビンスキーの論を比較し、両者ともに、様々な社会集団が異なる言語体系を持つ現象に着目した上で、それぞれの言語体系を背景とする人々との間の相互交流の実現可能性を検討していたと指摘する。実際、バフチンはヤクビンスキーが社会的方言を提唱したのと同様に、特定の社会集団の中でのみ通用する特殊な意味を持つ言語体系として「社会的言語（バフチン, 1996, p.38）」もしくは「ことばのジャンル（バフチン, 1988a, p.116）」が現れると指摘している。

ただしBrandistらは、ヤクビンスキーが、言語的多様性が消去される「未来」を夢見ていたのに対し、バフチンは、個々の人格における異質な意識同士が衝突し合う「現在」を評価していた点に大きな差違を認めている。そしてバフチンは言語的実践の理想像を「小説」という概念に付託したのだと分析する。

まずバフチンは、社会に偏在する複数の異言語集団に、個人が単に参与することそのものに対しては、高い評価を与えていない（「ラズノヤズィチエ（言語の多様性）」）。このことは、自分の家庭のほか、教会・役所においてそれぞれ異なる社会的言語を話す、文盲の農民をモデル事例として論じた議論の中で、具体的に展開されている。この事例の農民は、異なる社会集団に帰属する複数の言語を話してはいたが、彼自身のイデーは、それぞれの集団を背景とする人々の言説と響き合うことはなかったという。これは、それぞれの社会の言語的実践に受動的に呑み込まれ、自分自身のイデーとの明確な交渉がみられないという点で、彼がホモフォニー的モノローグの状態にとどまっていることを示すモデルといえる。

中心都市から遠く離れた文盲の農民は、・・ある言語（教会スラヴ語）で神に祈り、別の言語で歌い、家庭では、第三の言語を話した。また読み書きのできる者に郷（ヴォーロスチ）（帝政時代のロシアの地方行政組織）への請願書を書き取らせようとする時には、さらに第四の言語（公文書の言語<官庁用語>）で話そうとした。・・しかし、これらの言語は農民の言語意識において対話的に相関してはいなかった。・・・彼はまだある言語を（そしてそれに対応する言語世界を）他の言語の眼で見ること（つまり日常生活の言語と生活世界を、祈禱あるいは歌の言語で見ること、またその逆）ができなかった。（バフチン, 1996, p.71）

一方でバフチンは、農民個々人がこれらの異言説を自身の人格において意識し、それらの言語的実践に単に呑みこまれるのではなく、批判的に相互参照することで自分自身のイデーとし、その視点から他者の言語を再解釈するとき（それらと対話的に相関するとき）、言語的能動性が起動するのだと高く評価する。この際、外在的なラズノヤズィチエは、話者の言語意識としての「ラズノレーチエ（ことばの多様性）」へと昇華する(Brandist & Lähteenmäki, 2010; 桑野, 2011)。そしてこの種の能動的な言語意識は、相手が背景とする文脈の異質性が高まるにしたがい、より一層、芸術的（モノローグ的）なものとなる。

この農民の意識において、諸言語の批評的な相互照明が始まるやいなや、・・・それら諸言語間に能動的な選択的定位が始まったのである。・・・能動性を獲得した文学的な言語意識は、・・・もちろんより多様で深い諸言語間の矛盾をあらかじめ見出す。・・・あらかじめ見出される多様な諸言語（ラズノレーチエ）の性格と、そこにおける定位の方法は、言葉の具体的な文法論的生命を規定する。（バフチ

ン, 1996, pp.71-72）

そしてBrandistらによれば、バフチンのいう「小説」とは、個々の人格における芸術的社会イメージに相当するのだという。つまりこの場合の小説とは、様々な文脈特性を背景とする人々（登場人物）の人格相互の衝突（出来事）としての、話し手（作家）個々人の内的意識を象徴する概念といえる。さらにこの芸術的言語意識は、異なる空間・時間を背景とする聞き手（読者）に向けられており、彼らの応答を待つモノローグ的発話のリソースともなる。

以上の議論を拡張的に解釈するならば、バフチンの描く理想的な言語的実践とは、様々な属性の文脈を背景とした聞き手との交流を展開可能とするものであると同時に、彼らのイデーに完全には呑み込まれ得ない、話し手一人ひとりの人格における独自のモノローグ的イデー＝ラズノレーチエをも展開させ続けることであるように思われる。つまり我々一人ひとりがポリフォニー小説の作家となり、実在他者との接触を行うと同時に、彼らとの社会的諸関係を内在化させた独自の内的な小説を展開し、さらに、その人格的視点から実在他者との交流のあり方を批判的に調整し続けていくというポリフォニー的ダイアローグの実現を、バフチンは求めているのではないだろうか。

3.3. 社会集団のポリフォニックな斉一性の成立可能性（「ともに」「さまざまな」声を出す）

以上の議論をさらに発展させるならば、たとえ同じ空間・時間における活動履歴を有し、同じ社会的言語を話し、仲間だと相互に信じて疑わないような話者らの関係（第三者が観察して「同じ」社会集団を構成しているとみられる人々）とは、独自性を失わない人格同士の接触を通して維持され続ける「パフォーマンス」なのだと解釈することができる。

この議論に関連する概念として、「同意（ソグラシエ）」は注目に値する。ソグラシエとは、「ソ（ともに）」「グラス（声）」をかけあわせたバフチンの造語という（桑野, 2008, 2011）。バフチンは、複数の人間が同じ見解に到達する場合ですら、彼ら個々人の抱く独自のイデーを響かせ合っているのであり、互いの人格が融合するわけではないことを強調する。桑野（2008）は、このようなバフチンの世界観をソグラシエの概念に引き寄せ、「ともに声をだすこと＝協働」「さまざまな声があること＝対立」としてまとめる。

真の人間的生を言語的に表現するなら、それにふさわしい唯一の形式は、完結することのない対話である。生はその本質において対話的なものである。生きるとは即ち対話に参加すること、－尋ね、耳を傾け、答え、同意したりすることである。・・人は、自己のすべてを言葉の中にこめ、この言葉は対話的に織りなされた人間の生の中へ、世界の響応（シンポジウム）の中へ入っていく（バフチン, 1988b, p.262）。

ソグラシエとは、いってみれば、見解の一致を「演示」する、個々独立した複数の人格のアンサンブルといえる。その意味では、外部から観察して、同じ社会的言語のもとに協働しているようにみえる仲間同士であっても、常に、異質な声が響き合っていることになる。この異質さは、人々のイデーの溶解にもとづくスムーズで一枚岩的な（ホモフォニー的に同質性を求める）集団の構築を理想化したヤクビンスキー（および、彼にこの種の言語論を論じさせた当時の権力者）にとって、排除すべき存在であっただろう。一方、バフチンにとってそれは言語的実践の原理であり、また人々が、自らの人格の独自性を失わずに社会集団の斉一性との妥当な関係を交渉する、ポリフォニー的存在であり続けるための、重要な理論的抜け道だったのではないかと思われる。

3.4. バフチン総論（ポリフォニー社会を実現するために求められること）

以上の議論を踏まえるならば、ポリフォニー小説とは、ポリフォニー的ダイアローグを比較的容易に実現させるための特殊な機能を備えた舞台装置として解釈可能だろう。ポリフォニー的ダイアローグを十分に展開することが困難な話者であっても、このテクストを介することで必然的に、他の読者との人格の独自性を巡る争いに参加せざるを得なくなる。こういった仕掛けが、ドストエフスキーの小説には仕込まれていたということではないか。その意味では、無論、読者の側に十分な力が備わっているのであれば、たとえホモフォニー的テクストを介する場合であっても、ポリフォニックな交流を豊かに展開することも可能ということになる。その意味では、両者の違いは、あくまでも相対的なものといえる。

当時のソ連の政治権力に対するヤクビンスキーの関係を事例にみるまでもなく、我々の人格は常に、その独自

性を封殺し、集団の部材として扱おうとする権力者のイデーに犯される危険にさらされている。しかしバフチンは、たとえそのようなホモフォニー的状況であってもなお、常に抜け道を見出し、自分らしさを失わず、ポリフォニー的ダイアローグへと向かう力強い言語意識の修練を我々一人ひとりに対し、求めているのではないだろうか。

本論では、以上のようにバフチンが評価したと考えられる、実践としての斉一性と個々人の独自性との間の妥当な距離感を演示し続ける、理想的な言語的実践としての「社会集団」を、ポリフォニー小説になぞらえ「ポリフォニー社会」と呼ぶことにする。

4. ヴィゴツキーの論におけるモノローグ・ダイアローグ

ヴィゴツキーの伝記を手がけたレオンチェフ(2003)は、その冒頭に、ヴィゴツキーの言語論に大きな影響を与えた重要人物の一人としてヤクビンスキーの名前を挙げている。またヴィゴツキーがヤクビンスキーの言語論を取り込み、人格の内的な言語意識（「内言」）の発達論として発展させたとの指摘もなされている (Bertau, 2005; Friedlich, 2005; 田島, 2010b)。先取り的にいうなら、ヴィゴツキーの発達論とは、既存の社会実践を背景とする大人のことばを模倣的に取り込みつつ、同時に、自分らしさを発揮し得る子どもの内言世界＝人格の成長を捉えたものといえる。その意味で、バフチンが対立的に捉える傾向にあったポリフォニー的ダイアローグとホモフォニー的モノローグとの関係を、人格の時系列的な変化を軸に、一元的に捉えたものと解釈できるのである（註9）。

本節ではまずヴィゴツキーの発達論を概観し、それにもとづく、彼自身のモノローグ（書きことば）・ダイアローグ（話しことば）論の展開について検討する。さらにヤクビンスキー・バフチンの議論との比較検証を行う中で、ヴィゴツキーの論から独自に捉えることができる、社会集団および個人の人格との関係について考察を深める。

4.1. 遊びを通した大人との交流の表象化過程としての発達

ヴィゴツキーの発達論を最大限に要約するならば、大人等との交流を通して学習したことば（「外言」）の意味を子ども独自の視点から組み直し、新たな個人的解釈を行う（「内言」）ようになる「高次精神機能」の成長プロセスを描いたものとして解釈できる。このような認知発達を遂げる中で、子どもの思考は自分が生きる環境の事実的認知（「場面的束縛（ヴィゴツキー, 1989, pp. 16-17）」）にとどまらず、自分自身の内的文脈を背景とする能動的な表象操作を可能にするのだという。そしてこの発達を考える中で、子どもたちの「遊び」および「人格」は、重要な意味を持つ。4.1.および4.2.では、「子どもの心理発達における遊びとその役割(1966)」の議論を中心に、関連する複数の著作からの引用も含め検討する。

ヴィゴツキーによると、子どもは生後数ヶ月から大人とのやりとりのなかで、「お母さんのいうことを聞かねばならない」「他人のモノにさわってはいけない」等の、一定のルールを遵守するよう要求されるのだという。この場合のルールとは、たとえば、家族の一員として遵守すべき子どもの役割を示すものであり、子どもの言動を家族という社会集団の実践的な斉一性へ向けさせる大人側の働きかけといえる。これは結果的に、バフチンの論の文脈でいえば、ホモフォニー的モノローグに近い性質の交流を示すだろう。

ひとつのルールは—ピアジェが指摘するように—子どもに対する大人の一方向的な働きかけから発生する。他人のモノをさわってはいけないということを挙げるならば、これはまさしく、母親が説教したルールである。また、テーブルに静かにつきなさいということは、大人が子どもに関する外的な掟（おきて）として提起したものである。（ヴィゴツキー, 1989, p.14）

しかし一方で、子どもたちは、大人との相互交流の中で示されたルールを受動的に模倣するだけではなく、それらの意味を彼らなりに独自に組み替えるようになるのだという。そして行為そのものを目的として自発的に営まれる子どもたちの「遊び」（他者から強制されて行う「仕事」ではなく）が、この内的な組み替えのプロセスにおいて発生するという（神谷, 2007）。

遊びのルールは、・・・自分自身のためのルールであり、ピアジェが言うように、内的自己規制と自己決定のルールである。子ども自身が、「ぼく、遊ぶときは、こんなふうにしなくちゃ」と言っている。これは、「これはしてもいい、これはしちゃダメ」と子どもが言われて

いるものとは、まったく別のものである。（ヴィゴツキー, 1989, p.15）

子どもは仲間との遊びを通し、特定の場面における特定の大人どの交渉に限定された言語を、任意に組み替えるイメージ操作の自由を得る（虚構的にではあるが）。そしてそれは、子どもの役、母親の役、教師の役等を虚構的に操作し、それぞれの視点から相互の言動を制御・解釈するという意味でのルール（ただし、あらかじめ定型化されたものではなく、子どもたちの相互交流を通して見出され、修正されていく動的なものとしての）をともなう社会的行為としてなされる。つまり、子どもの言語は遊びのなかで、特定の場面における具体的な事物や人々との交渉への適用にとどまるという意味での場面的束縛から、相対的に自由になるのだといえる。

子どもが母親の役を演ずるのであれば、そこには、母親としての行動のルールがある。子どもが演ずる役、モノに対する態度・・・は、たえず、ルールから生じるであろう。つまり、虚構場面は、たえず、ルールを含んでいることになろう。（ヴィゴツキー, 1989, p.12）

そしてこの遊びにみられる、子どもたちの虚構的な言語使用（外言）は、後に、子どもたち自身の内的な言語意識として表象化される（内言）。ヴィゴツキーは、子どもたちに内言化されつつある他者との外的なやりとり（外言）を、内言における自律的な操作への転化にもっとも近接しているという意味で「発達の最近接領域」と呼び、遊びは子どもたちにとって、この発達の最近接領域として機能すると指摘する（ヴィゴツキー, 1989, pp.30-31）。

4.2. 人格の形成と「語義（ズナチェーニエ）」と「意味（スムィスル）」

そしてこの発達にともない、より独自性の高い情報処理を行う子ども個々の人格が次第に形成されるようになる。ヴィゴツキーのいう人格とは、大人等との外在的な社会関係が子どもたちの意識内に展開した社会的交流の総体として捉えることができる。

すべての高次精神機能は、社会的規律の心内化された関係であり、人格の社会的構造の基礎である。・・・精神過程に転化してもなお、それは偽似社会的である。人間は自分自身との差し向かいで、コミュニケーションの機能を保持する。・・・マルクスの有名な命題を変えて私たちは、人間の心理学的本性は、社会的関係の総体であり、内面に移され、人格の機能とかその構造の形式となった社会的諸関係の総体であるということができよう。（ヴィゴツキー, 2005, p.183）

以上までの論をまとめると、ヴィゴツキーは、子どもたちが親等の特定の大人との相互交流に個別に参与するのみならず、その諸関係を内的に組み替え、独自の解釈をともなう社会的交流として展開し得る主体的人格となるまでの成長プロセスを「発達」として描きだしたのだといえる。

この人格の内的社会性を説明するため、ヴィゴツキー(2012, pp.277-284)は「ドラマ」と呼ぶ概念を使用する。ヴィゴツキーのいうドラマとは、内化された人間（役割）同士が相互に接触する、独自のルールにもとづいた内的社会の展開であり、実在他者との交流で得られた情報を取り入れ、新たに解釈し直す行為として生じるものである。たとえば、保育園の保母が指導的に導入したことば（「園庭に転がるドングリ」等）を、子どもの周囲の社会関係を反映した虚構の物語（「ドングリの子ども役になり、ドングリのお父さんとお母さんがいる森に帰るストーリーを展開する」等）に変えてしまう遊びは、子どもたち個々の内的なドラマが、彼らの言語交流に次第に反映されつつあることを示す（神谷, 2014）。

この交流はまた、バフチンの論の文脈からみれば、個々の人格の独自性が発揮される、ポリフォニー的ダイアローグの性質を帯びつつあるものといえる。つまりヴィゴツキーのいう発達とは、社会集団の斉一的実践に従属するよう求める大人とのホモフォニー的モノローグに巻き込まれるにとどまらず、それらの大人の視点を内化し、子ども独自のストーリーを展開するポリフォニー的ダイアローグの操作にまで至る、個々人の人格の成長として解釈できるということである。

他者との交流の中で使用されることばの一面的な意味は、「語義（ズナチェーニエ）」とも呼ばれる。さらに、「語義（ズナチェーニエ）」を内的社会（人格）において多面的に再解釈した個人的な意味は、「意味（スムィスル）」とも呼ばれる（ヴィゴツキー, 2001, pp.414-415）。この両者は対立的な関係にはなく、話者が発するあらゆることばには両者の性質が共存しており、話者が参加する交流の特徴により、その比率が

相対的に変化していくものとして捉えられる（中村, 2014）。以上の議論をまとめるならば、子どもは他者との「語義（ズナチェーニエ）」を通したホモフォニックな接触を可能にするだけではなく、同時に、個々人の独自の解釈可能性（「意味（スムィスル）」の展開可能性）をも失わないことを通し、既存の言語実践のあり方を更新し得る、ポリフォニックな創造性を発揮するのだといえる。

4.3. 科学的概念・生活的概念とモノローグ・ダイアローグ

以上の発達論をベースとして、ヴィゴツキーの論におけるモノローグ・ダイアローグの展開をみると、それは書きことば（科学的概念）を介することによる、内言の自覚性・随意性の獲得に関する議論において、明確に認められる（田島, 2010b）。本節以降はヴィゴツキーの主著である「思考と言語(1956)」の議論を中心に、関連する複数の著作も含め検討する。

ヴィゴツキーは「思考と言語」において、ヤクビンスキーのモノローグ・ダイアローグ・統覚に関する議論を引用し、モノローグは書きことば、ダイアローグは話しことばに相当すると論じる（註7）。そして会話場面を共にした者同士のダイアローグでは、相手が既に知っていることが想定される共有情報（これを「主語」と呼んだ）に関する言語が省略される傾向にあると指摘し、これを「述語主義」と呼ぶ(ヴィゴツキー, 2001, pp.398-405)。

対話におけるこのような種類の省略を研究したヤクービンスキーは、問題がどこにあるかをおたがいに知っている場合の憶測の理解およびそれに対応した遠回しの発言、対話者のもつ統覚群の一定の共通性は、言語的コミュニケーションにおいて極めて大きな役割をはたすという結論に達している。(ヴィゴツキー, 2001, pp.401-402)

このように述語化された内言は、学齢期に至るまで子ども自身の思考を媒介し、彼ら独自の人格を形成することになる。そして多くの場合、この内言は、ヤクビンスキーによる分析をまとめた本論の交流モデルでいう①②にあたる、両親や友人などの、過去経験を共有した相手との話しことば（ダイアローグ形式）による交流のために使用される。この種の言説群はまた、「生活的概念」とも総称される。

しかし子どもが学齢期に至ると、この状況に変化が訪れる。学校において書きことばを志向する教育が行われるにともない、本論の交流モデルでいう③④にあたる、モノローグ形式をともなう交流に参加することが求められるようになるからである。学校において教授されるこの種の言説群は、「科学的概念」とも総称される。この科学的概念は、主に、具体的で目にみえる事物について解釈するために使用される生活的概念に対し、特定の世界における具体的な事物の特性を一般化し、異なる時空間に位置する個々の具体的事象と結びつけ、体系的に比較・解釈していくために使用されるという特徴を持つ。つまり科学的概念とは、その定義から判断するならば、ヤクビンスキーの論でいうモノローグ形式の交流を支える言語構造を、抽象性・体系性の観点から、より詳細に明らかにしたものと解釈できる。

ヴィゴツキーは、この科学的概念の学習を通してより明確に習得される内言の機能を、「自覚性」および「随意性」と呼んだ。自覚とは、ことばの意味を別のことばによって定義をしたり、他のことばとの体系的な関係を自分なりの観点から論理的に構築したりすることを、また随意とは、このような自覚を通し、自らの思考を言語的に支配し自律的に制御できるようになることを意味する（中村, 1998; 柴田, 2006）。

さらに、この議論に深く関わる精神機能として「想像」があげられる。想像とは、先述の遊びを継承した、子どもたち個々が内的に行う言語操作であり、特に青年期以降、学習者独自の人格を自律的に仕立て上げる行為として位置づけられる（ヴィゴツキー, 2004, pp.270-271）。そして自覚性・随意性をともなう（モノローグ性の高い）想像を発揮することにより、学習者らは、実際に見聞したことのある具体的な情報をもとに、科学的概念の抽象的体系を介し、一見バラバラで無関係にみえる、空間・時間を異にする様々な世界における具体的知見をまとめ、相互に比較検証することを可能とするのである（ヴィゴツキー, 2001, p.248, pp.324-325）。

想像力は人間の行動や発達においてきわめて重要な機能を獲得しており，それは人間の経験を拡大する手段となります。なぜならば，人間は自分が見ていないものを想像することができますし，自分の直接的な個人的経験にはないことも他人の話や記述によって思い描くことができます。また，自分自身の経験の狭い範囲や狭い境界内

にとどまることなく，他人による歴史的あるいは社会的経験を想像力を使って自分のものとしながら限りなく歩んでいくことができるからです。・・・新聞を読んで，自分たちが直接の目撃者ではなかった何千ものできごとについて知ることができます。（ヴィゴツキー, 2002, p.25）

我々が実際に見聞でき、具体的にふれあうことのできる世界（人々との相互交流）の範囲は、狭く限定されている。普段の生活であれば、家庭・職場（学校）・住居地域＋αの世界が広がっている程度であろう。たとえ他の地域・国々へ旅行に出かけたとしても、その行動範囲は多くの場合、一般市民や観光客のために用意された安全な地区に限られ、その他の地区へ出入りすることは、通常、まずできない。つまり具体事象の表象操作にとどまる限り、我々の認知は、事物や交流相手の具体性に束縛されるという意味での、場面的束縛の影響を受け続けることになる。

しかし自覚性・随意性をともなう想像（遊び）を発揮することで、学習者は自分の生きる狭い現実世界の経験を資源とし、時空間を異にする人々が持ち込む情報を自らの内言世界に取り込む（モノローグ的な「意味（スムィスル）」とする）ことを可能にする。つまり、書きことば等を通して得た情報を抽象化し体系的に内化した、複数の社会的役割を任意に操作する「ドラマ」としての独自の意味に再編する概念的思考を起動するということである。これらの積み重ねにより学習者の内言世界は、具体的経験への場面的束縛から相対的により自由な人格になるのだと考えられる。

そしてこの自覚的なドラマとは、バフチンとの関連でいうなら、異質な文脈を背景とした聞き手との相互交流をポリフォニー小説的に展開する、話し手の人格におけるモノローグ的言語意識（ラズノレーチエ）と響き合うものと思われる。

4.4. ことば主義から始まるモノローグ的想像力

ただし、このような自覚性をともなう想像力を随意に展開することは学齢期以降の学習者にとって、決して容易ではない。生徒たちにとってなじみの薄い抽象的な概念の学習では、彼らの生きる世界との関連性を見出すことができず、そのため長期間、教師が教示するとおりに字義どおり模倣するにとどまる場面もみられるという（ことばの「語義（ズナチェーニエ）」の取り込みにとどまるということ）。ヴィゴツキーはこのような、子ども自身の経験的知識と食い違う概念学習を「ことば主義」と呼んだ。

しかし先述した、大人の言説に巻き込まれつつも、同時に、子ども個々の人格的独自性を発揮するというヴィゴツキーの発達の原則は、ここでも活かされる。ことば主義的に獲得した科学的概念は後に、学習者の具体的な知識である生活的概念と結びつき、自覚的に随意に、両者を改造する発達がみられると指摘されているからである（ヴィゴツキー, 2001, pp.315-318）。

この資料は、子どもの科学的概念にはことば主義のあることを明らかにした。生活的概念の場合には、ことば主義の危険があるだろうか？ない。・・・子どもは科学的概念をしばしばことばだけで、図式的に習得するので、両者の食い違いは増大する。この食い違いそのものを私は、欠陥として見るのではない。なぜなら、どんな学校教育においても、このような食い違いは、子どもの知的発達の動因をなすものであり、子どもの発達の新しい可能性をもたらすものだからである。（ヴィゴツキー、1975、pp.113-114）

裏を返すなら、なぜ子どもは、自分が納得できないような教師のことばを「語義（ズナチェーニエ）」として習得できるのだろうか。この疑問に対するヴィゴツキーの示唆も、やはり、先述の遊び論の中で展開されているように思われる。

ヴィゴツキーは、複数の子どもが参加する遊びの場合、個々の子どもには、その遊びのルールに従い、自分の直接的な欲求を抑える傾向がみられると指摘する。たとえば、キャンディをコインとして表象化し、店員と顧客の役割を取得した遊びを展開するならば、個々の子どもは進んで「食べたい」という直接的な欲望を抑えるということである。つまり「集団的実践を通してより大きな楽しいことが待っている」と期待できる場合、子どもたちは相互に期待される役割の行動ルールに従い、進んで、他者と協調的に行動するというのである。

遊びのなかで、直接的欲望を拒絶するという意味において、子どもの意志は最大に達する。・・こうして、遊びの本質的指標は、感情になったルールである。「感情になった観念、情念に転化した概念」というスピノザの理想の原型は、遊びのなかにある。遊びは、随意性と自由

の王国である。・・ルールは、もっとも強力な衝動として勝利する（スピノザを参照のこと－感情はもっとも強力な感情によって打ち負かされる）。（ヴィゴツキー, 1989, p.25）

このことを概念的思考（学齢期以降の想像・遊び）の発達に拡張的に適用するならば、将来、自分自身の「意味（スムィスル）」として展開できる、より大きな「楽しみ」が期待できるからこそ、現在のところは理解しがたい概念の「語義（ズナチェーニエ）」を、教師のいう通りに進んで習得する（ことば主義的に学ぶ）者としての生徒の役割を引き受けるのだと解釈できる（註8）。「（科学的概念の学習にみられる）食い違いは、子どもの知的発達の動因をなす」というヴィゴツキーのことばは、このような情動的要因を考慮に入れたときに、より現実的かつ説得力のあるものとして受け止められる。

ここで論じられているのは、発達的観点からみた、バフチンのいうホモフォニー的モノローグの肯定的な評価である。なぜ生徒は教師のいうことばを従順に受け入れる（ようにみえる）のか。つまり、教室という社会集団のルールに従属する生徒の役割を担うのか。それは、自分自身の内言世界にその「語義（ズナチェーニエ）」を取り込むことで、独自の「意味（スムィスル）」の王国を自由に随意に展開できるという将来を夢見る情動（動機づけ）にもとづいているからなのではないか。その意味では、教師とのホモフォニー的モノローグ（他者の「語義（ズナチェーニエ）」の字義通りの取り込み）の受け入れとは、独自のポリフォニー的ダイアローグ（「意味（スムィスル）」の展開）の可能性を夢見る子どもたちの動機づけに支えられ、そしてそれを実際に実現させる契機となる跳躍板として位置づけられるように思われる。

4.5. ヴィゴツキー総論（従属モードと創発モードの総体としての発達）

ヴィゴツキーは、一方では、子どもが大人の言説に巻きこまれる姿を描き出す。このことは、モノローグ形式を志向する科学的概念の学習場面において特に顕著であり、大人のことばを字義通りに習得することば主義がみられると指摘する。他方で、彼は、この大人のことばを心的資源として、子ども独自の内言世界としてのドラマを発展させ、既存の実践のあり方をも変更可能とするプロセスを「発達」として描き出す。

以上のようにヴィゴツキーは、他者の言語実践に巻きこまれつつも、同時に、一方的にその言語によって規定され尽くされ得ない、話者の人格の独自性を一貫して支持している（中村, 2014; 佐藤, 2010）。そしてこのことは、客観的に観察可能な社会集団を、バフチンが強調したように、独自性を保った個々人の人格らの衝突の総体として描くことにつながる。つまり他者との言語使用に関する斉一性が交渉される（たとえば教師の導入することばの字義通りの習得を通して）と同時に、話者個々人の人格においてその意味の独自の再編をもたらす（たとえば教師によって導入されたことばをドラマ的に改変する想像を通して）言語的実践として捉えられるということである。

さらに本研究で展開したヴィゴツキーの議論の独自性は、（本研究で参照した文献の範囲において）バフチンが対立的に描く傾向にあったホモフォニー的モノローグとポリフォニー的ダイアローグとの関係を、人格の漸次的な成長モデルの中で統一的に描いている点にあると思われる（註9）。大人の使用することばの「語義（ズナチェーニエ）」を字義通り受け入れる交流は必然的に、子どもの意図よりも、大人の意図が強く反映されるホモフォニックな関係として展開されるものとなろう。しかしヴィゴツキーの論によれば、子どもはその関係にとどまらず、後に、それを人格における「意味（スムィスル）」として組み替えていく中で、彼ら独自の声を相対的により強く発揮していく、つまり大人との関係をポリフォニックなものへと変革していくというのである。

ここで明らかにされているのは、ヤクビンスキーが結果的に捨て去り、またバフチンが理想化した、ポリフォニー社会を実現するための、話者個々の人格の成長論である。そしてさらに、このヴィゴツキーが描く人格の成長過程においては、ホモフォニー的モノローグおよびポリフォニー的ダイアローグも共存関係にあり、大人が持ち込む既存世界の言説を習得する「従属モード（模倣）」と、それらの思想を組み合わせ、新たな思想として既存世界を改変しようとする「創発モード（遊び・想像）」の比率が、時系列的に変化し得る総体として組み込まれているように思われる。つまり、バフチンの議論においては対立的に布置される傾向にあるホモフォニー的モノローグとポリフォニー的ダイアローグは、ヴィゴツキーの発達論を介して解釈するならば、個々の独自の人格を構築する上でのいわば共犯的存在として、どちらが善でどちらが悪ともいえないものとして位置づけられ

るということである（註10）。

5. おわりに（社会実践を妥当に分析するための研究的視座とは）

本論においては、ヤクビンスキーおよびバフチンの、それぞれの論におけるモノローグ・ダイアローグ概念の展開について検証した。またバフチンのモノローグ・ダイアローグ論を拡張するものとしてのヴィゴツキーの発達論について、その展開をみてきた。その結果、社会集団とは個々の人格において紡ぎ上げられる表象であり、また同時に、これらの人格が衝突し合う言語的交流の総体であることを確認できた。つまり客観的に観察可能な社会集団の実践的な斉一性とは、話者の人格において内在的に交渉されるイメージであり、また同時に、その人格を備えた話者間の外在的な交流の総体（バフチンのことばでいえば「出来事」）としても位置づけられ得るということである。

社会集団と個々の人格との関係を語る言説は、いつの時代においても、繊細で微妙なものである。心理学においても、客観的に観察可能な相互作用や社会集団の構造分析を重視する学派、また主観的・個人的意識（人格）の分析を重視する学派の間で、その分析内容や検証手段を巡り、鋭い対立が繰り返し展開されてきたことは歴史的な事実である。しかし本論の知見からいえることは、様々な社会実践を実証的に分析するためには、そのいずれの視点も欠けてはならないということとなる。

たとえば、一見すれば、ある社会集団のメンバーとして他者との斉一的な行動をとっていると観察可能な人物であっても、彼の人格のレベルでは、その集団への違和感を感じ続けているという状況は現実にあり得るだろう。外部から観察できる次元のみを重視する立場では、この違和感を十分に描き出すことは困難である。しかし個人の人格のみに焦点を絞る立場に固執するのも、この違和感が、その人物の生きる世界の中でなぜ生じてきたのかという文脈としての、社会集団の構造特性の検証が不足しているという点で、十分な妥当性を有するとはいえない。社会集団に従属する部材としての個人ではなく、また一方で、社会集団から隔絶された意識でもなく、その独自性（この場合は違和感）を犠牲にすることもなく、他者との交流の中で社会集団の斉一性を交渉する「人格」を描き出すこと。このような緊張感に満ちた分析視点を維持することによってのみ、個人と社会集団との関係を妥当な形で検証できるのではないだろうか。

無論、一つの研究でこれらすべての視点を満たす分析を行うことは困難だろう。しかしその場合であっても、自分の分析手法の限界を意識し、同じ対象に対する別の分析手法がありえることを自覚すること、また他の複数の観点から同じ社会実践を検証するオプションの存在を理解しておくことは、ポリフォニー社会のあり方を提案すべき研究者にとって、忘れてはならない視座であるように思われる。

＜脚注＞

（註1）ドストエフスキー「作家の日記」からのこのくだりは、バフチン（ヴォロシノフ）の「マルクス主義と言語哲学」において（バフチン, 1989, pp.160-162）、またヴィゴツキーの「思考と言語」において（ヴィゴツキー, 2001, pp.405-406）も引用されている。両者に対するヤクビンスキーの影響を示す直接的な証拠とされる（桑野, 1977）。

（註2）家島(2010)の「仲間性」を相互交渉する交流の事例分析は、このことを具体化する上で有用と思われる。以下、家島の紹介事例から一部改変した事例を紹介する。Aは調査対象者であり、調査者であるBに、あるアニメが自分の人生に与えた影響について聞き取りを行っている。

A:えーと、女の人と男の人がいて
B:クリスチーナと
A:さすが（笑）意外とご存知で。っていうような話で、「なぜ戦うのか？」っていうことを言うシーンがあって・・・・えっとマニアックな話になって申し訳ない
B:あー、見ているからオッケーです
A:あ、オッケーですか（笑）シュラク隊のマスドライバーのレールが、っていうときに

AはBに対し、「えーと、女の人と男の人がいて」「マニアックな話になって申し訳ない」等、相手の知識を探るような発言を投げかけている。それに対しBが「クリスチーナと」「見ているからオッケーです」等、該当する知識を理解できていることを返している。

これはヤクビンスキーの論でいえば、統覚量の共通性を相互に可視化し合う言語的実践といえる。Aの「意外とご存知で」「オッケーですか」という発話は、Bとは同じ知識を共有する仲間であることのパフォーマンスと

して解釈できる。このことは、その後の彼らの発話が、相手には理解できると思われる情報の言語化をカットした「社会的方言」の性質を加速度的に帯びていった事実（「シュラク隊」「マスドライバーのレール」等）によっても確認できる。この種の言説が深まっていけば、彼らは特定の斉一的実践を行う社会集団（この場合、同じアニメを愛でるマニア）を構成する仲間として互いに、そして彼らの相互交流を観察する第三者によっても、認識されるようになるかもしれない。

しかし裏を返すなら、この斉一性のパフォーマンスは、BによってAの期待する応答がなされなければ、容易に崩壊することをも意味する。家島はこのような、厳密にいえば異なる互いの記憶の中に共通点を見出し、相互に仲間であることを確認しあう言説を「経験共有幻想」と呼ぶ。つまり社会集団とは、話者が個々の人格において互いに抱える主観的イメージであると同時に、その斉一性を相互に確認しあう言語的実践ということである。

（註3）バフチンは1920年代、複数の思想家たちと研究サークルを立ち上げており、そのメンバーの名義で、自身のアイディアを公刊した可能性が指摘されている(Clark & Holquist, 1984; 桑野, 2002; Shepherd, 2004)。この「バフチン・サークル」の主要メンバーの一人が、ヴォロシノフである。ヴォロシノフ名義で出された論文の彼自身の関与の程度は議論が分かれるが、ヴォロシノフ個人の論文として引用されることも多く、本論文でも該当箇所については「バフチン（ヴォロシノフ）」と並記した。

（註4）本論において「総体」は、マルクス・エンゲルス(2002, p.237)の「ドイツ・イデオロギー」で論じられた「総体（アンサンブル）」を意識したものとして使用している。この総体は、アンサンブルというルビが意味するように、集団としてのまとまりを維持しつつも、そのまとまりに「類」として収斂されきらない、独自性・単独性を持つ個人の集まり・協働を示す概念として解釈できるという（佐藤, 2010）。

（註5）バフチン(1995, pp.142-147)は、トルストイ小説の非ポリフォニー性について、彼の短編小説「三つの死（トルストイ, 1991）」を例にあげ説明している。この物語では、三人の登場人物の死が描かれている。しかしこれらの登場人物は互いに接触することなく、個別の社会的文脈の中で死に至る。「それぞれに閉ざされた世界を持つこの三者は、それらを包含する作家の単一の視野と意識の内において統一され、比較対照され、まとめて意味づけられている（バフチン, 1995, pp.143-144）」のであり、作家は彼らの行為を自分の思想にもとづき、「本人不在」のまま、一方的に意味づけるのだという。このようにトルストイの小説は、多くの登場人物らによる相互交流が描かれているにも関わらず、作家の思想によって統一された、一枚岩的世界を示すものとしてバフチンに捉えられている。

（註6）バフチンがドストエフスキーの代表的な短編小説の一つとして取り上げる「やさしい女」では、自殺した妻を目の前にした夫が、その理由を回想し続けることでストーリーが展開する（ドストエフスキー, 2010）。主人公である夫の内的意識においてうずまく、複数の人格との激しい相互交流のやりとりから読者は、妻の自殺の理由という、作家が用意すべき最終的なイデーを探す。しかしついに、この主人公の人格を離れた、ドストエフスキーによる決定的な理由説明はなされない。したがって読者はそのイデーを、主人公の自意識において展開する、登場人物らの相互交流に参加することで立ち現れる、自らの解釈として見出すしかない。

（註7）ただしヴィゴツキーは、内言もまた、書きことばと同様にモノローグであるとも記述する（ヴィゴツキー, 2001, p.405）。つまりヴィゴツキーはモノローグを、話者が一人で言語構成を行う「独り言」のような意味でも解釈しているように思われる。しかしここでいう内言は、人生を共にする（完全な統覚の共通性が期待できる）自分自身を相手に交流し、徹底的に伝達情報の言語化が省略される「恒常的述語主義（ヴィゴツキー, 2001, pp.409-410）」の文脈において論じられるものであり、それが、書きことばとおなじくモノローグ形式をとるというのは、ヴィゴツキー自身の議論の脈絡からみても違和感がある。本論ではヤクビンスキーの議論との接続性を重視し、統覚の共通性が期待できない相手との交流に用いられる、書きことば的性質を示す概念としての「モノローグ」を取り上げる。つまり、このモノローグ形式が内言において展開されるということは、恒常的述語主義ではなく、書きことばを志向する、自覚性と随意性をともなう内的交流の展開の広がりを意味するもの

として解釈するということである。

（註8）田島(2008, 2010a)は、中学校理科の授業観察を通し、自身の日常経験の視点からみて受け入れがたい概念の意味を教師によって導入された際、自分の解釈を抑え、当該の概念を字義通りに暗記しようとすることば主義が生徒らの学習においてみられることを明らかにした。一方、未来の学習可能性、つまり本論の文脈でいえば「意味（スムィスル）」を自分自身で構築できる可能性に期待し、進んで教師の定義を受け入れるという動機づけを持つ生徒の存在も明らかにした（以下の事例参照）。さらに単元終了期には、ことば主義的に習得した概念を資源として、独自のドラマ的解釈を行う複数の生徒がみられたことも報告した。

調：じゃあ、自分の考えと結びつかない時って、どうするの？ 木：ああ、結びつかない時は、そのまま教科書通り読んで、理解して、『ああ、そうなんかな』と思って次に進む、というのも手ですね。 調：なるほど、じゃあ、完全に納得しなくても、次に進むんだ？ 木：次に行って、そこから、復習から、復習やるじゃないですか、そこでこう完璧に理解できるときもある。

（註9）バフチン(1996, pp.159-160)は、権威的（ホモフォニー）であると同時に内的説得力を持った（ポリフォニー）、統合的なことばの存在可能を示唆してはいる。しかしその実現は稀であり、ほとんどの場合、両者は明確に分離しているとも述べている。つまり、少なくとも本論で取り上げたバフチンの著作においては、ホモフォニー的モノローグとポリフォニー的ダイアローグは、対立モデル的に描かれる傾向にあり、両者の相補的関係については、ヴィゴツキーの論における展開ほどには、明確に分析されていないといえる。

（註10）しかし現実には、豊かな「意味（スムィスル）」を自由に随意に展開するという学習者の動機づけを満たさぬまま、教師のいう「語義（ズナチェーニエ）」を字義通りに取り込むことで学習が終了してしまう状況も多いだろう。つまり、確実に学習者らのことば主義を発達の跳躍板とするためには、親や教師等の大人が意識的に、学習者自身の変革的な動き（遊び・想像）を許容し、ポリフォニー的ダイアローグを展開できる舞台装置を設定するような教育的支援を行う必要があるということである。このヴィゴツキーの論を活かした具体的な実践支援・事例研究については、田島(2010a, 2011)および富田・田島(2014)も参照されたい。

＜引用文献＞

Alpatov, V. (2004). The Bakhtin Circle and problems in linguistics. In C. Brandist, D. Shepherd, & G. Tihanov(Eds.), *The Bakhtin Circle: In the master's absence*. Manchester: Manchester University Press. pp.70-96.

朝妻恵里子　(2005).　言語の「機能」をめぐって：ヤクビンスキイの意義と限界　言語情報科学, 3, 1-14.

バフチン, M. M.　斎藤俊雄（訳）(1979).　生活の言葉と詩の言葉　磯谷孝・斎藤俊雄（訳）　ミハイル・バフチン著作集①フロイト主義／生活の言葉と詩の言葉　新時代社　pp.213-262.

バフチン, M.M. 佐々木寛（訳）(1988a).　ことばのジャンル　新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛（訳）　ミハイル・バフチン著作集⑧／ことば対話テキスト　新時代社　pp.113-189.

バフチン, M.M.　伊東一郎（訳）(1988b).　ドストエフスキー論の改稿によせて．新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛（訳）　ミハイル・バフチン著作集⑧／ことば対話テキスト　新時代社　pp.241-278.

バフチン, M. M.　桑野隆（訳）(1989).　マルクス主義と言語哲学：言語学における社会学的方法の基本的問題　未來社

バフチン, M. M.　望月哲男・鈴木淳一（訳）(1995).　ドストエフスキーの詩学　筑摩書房

バフチン, M. M.　伊東一郎（訳）(1996).　小説の言葉　平凡社

バフチン, M. M.　小林潔（訳）(2002).　芸術のことばの文体論　桑野隆・小林潔（編訳）バフチン言語論入門　せりか書房　pp.99-219.

バフチン, M.M.　桑野隆（訳）(2013).　ドストエフスキーの創作の問題　平凡社

Bertau, M.C. (2005). A dialogical perspective for psycholinguistics. In M.C. Bertau, & J. Friedrich (Eds.), *Think about language dialogically: Understand*

action dialogically. Presented at the Interdisciplinary Conference. Munich, Germany. pp.17-26.

Brandist, C. (2007). The Vygotsky and Bakhtin circles: Explaining the convergence. In R. Alanen, & S. Poyhonen (Eds), *Language in action: Vygotsky and Leontievian legacy today*. New Castle: Cambridge Scholars Publishing. pp.79-100.

Brandist, C., & Lähteenmäki, M. (2010). Early Soviet linguistics and Mikhail Bakhtin's essays on the novel of the 1930s. In C. Brandist, & K. Chown(Eds.), *Politics and the theory of language in the USSR 1917-1938: The birth of sociological linguistics* London: Anthem Press. pp. 69-88.

Clark, K., & Holquist, M. (1984). *Mikhail Bakhtin*. Cambridge: Harvard University Press.（クラーク , K., & ホルクウィスト , M. 川端香男里・鈴木晶（訳）(1990). ミハイール・バフチーンの世界 せりか書房）

ドストエフスキー , F.M. 米川正夫（訳）(1970). 作家の日記 河出書房新社

ドストエフスキー , F.M. 井桁貞義（訳）(2010). やさしい女：白夜 講談社

Friedlich, J. (2005). The use and function of the notion of dialogue in the Soviet-Russian discourse of the 1920s, especially with Yakubinsky and Vygostky. In M.C. Bertau, & J. Friedrich (Eds.), *Think about language dialogically: Understand action dialogically*. Presented at the Interdisciplinary Conference. Munich, Germany. pp.5-16.

Gulida, V. (2010). Theoretical insights and ideological pressures in early Soviet linguistics: The cases of Lev Iakubinskii and Boris Larin. In C. Brandist, & K. Chown(Eds.), *Politics and the theory of language in the USSR 1917-1938: The birth of sociological linguistics* London: Anthem Press. pp.53-68.

幅充子 (2006). M.M. バフチンにおける対話論とカーニバル論：S.M. エイゼンシュテイン『メキシコ万歳！』を中心とする映画理論への応用 おろしゃ会会報（愛知県立大学）, 13. (2014 年 4 月 1 日取得 http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~kshiro/orosia13-2.html)

磯谷孝 (1979). 交流としての言語の理論 バフチン , M. M. 磯谷孝・斎藤俊雄（訳） ミハイル・バフチン著作集①フロイト主義／生活の言葉と詩の言葉 新時代社 pp.264-280.

家島明彦 (2010). インタビューにおける語りの顕在化と潜在化：語り手と聴き手の関係性によって見えてくる／見えなくなるもの 質的心理学フォーラム , 2, 85-87.

Jakubinskij, L.P. (2004). Über die dialogische Rede (Hommel, K. & Meng, K. trans,) In K. Ehlich, & K. Meng(Eds.), *Die Akutualität des Verdrängten: Studien zur Geschichte der Sprachwissenschaft im 20. Jahrhundert*. Heidelberg: Synchron. pp.383-433.

神谷栄司 (2007). 保育のためのヴィゴツキー理論：新しいアプローチの試み 三学出版

神谷栄司 (2014). 保育実践の底に流れる理論 神谷栄司・前田美智代（編） 保育の四季：「こころ」の成長 三学出版 pp.55-72.

Knox, J.E. (1979). Lev Jakubinskij as a precursor to modern Soviet semiotics, *Dispositio*, 4, 317-320.

桑野隆 (1977). ヴィゴツキイとバフチーン 窓 , 23, 10-13.

桑野隆 (2002). バフチン新版：<対話>そして<解放の笑い> 岩波書店

桑野隆 (2008). 「ともに」「さまざまな」声をだす：対話的能動性と距離 質的心理学研究 , 7, 6-20.

桑野隆 (2011). バフチン：カーニヴァル・対話・笑い 平凡社

レオンチェフ , A.A. 森岡修一（訳） (1980). 言語コミュニケーションの理論 レオンチェフ , A.A.（編） 米重文樹・森岡修一・桑野隆（訳） 現代ソビエト心理言語学：言語活動理論の基礎 明治図書出版 pp.71-86.

レオンチェフ , A.A. 菅田洋一郎（監訳）・広瀬信雄（訳） (2003). ヴィゴツキーの生涯 新読書社

マルクス , K.H., & エンゲルス , F. 廣松渉（編訳）・小林昌人（補訳） (2002). 新編輯版ドイツ・イデオロギー 岩波書店

中村和夫 (1998). ヴィゴーツキーの発達論：文化 - 歴史的理論の形成と展開 東京大学出版会

中村和夫 (2014). ヴィゴーツキー理論の神髄：なぜ文化 - 歴史的理論なのか 福村出版

Oliviera, R.S., & Lyra, M.C.D.P. (2012). Yakubinsky and the circle of Bakhtin: Convergences. *Paidéia*, 22, 251-260.

佐藤公治 (2010). ヴィゴツキー心理学の「射程」：ヴィゴツキーが人間研究で目指したもの 活動理論

ニューズレター , 19, 1-26.

Shepherd, D. (2004). Re-introducing the Bakhtin circle. In C. Brandist, D. Shepherd, & G. Tihanov(Eds.), *The Bakhtin Circle: In the master's absence*. Manchester: Manchester University Press. pp.1-21.

柴田義松　(2006).　ヴィゴツキー入門　寺子屋新書

田島充士　(2008).　単声的学習から始まる多声的な概念理解の発達：バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から　質的心理学研究 , 7, 43-59.

田島充士　(2010a).「分かったつもり」のしくみをさぐる：バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から　ナカニシヤ出版

田島充士　(2010b).「分かったつもり」をどのように捉えるか：ヴィゴツキーおよびヤクビンスキーのモノローグ論から ヴィゴツキー学 , 別巻 1, 1-16.

田島充士　(2011).　再文脈化としての概念変化：ヴィゴツキー理論の観点から　心理学評論 , 54, 342-357.

トルストイ , L.G.　中村白葉（訳）(1991).　トルストイ前期短篇集　福武書店

富田英司・田島充士（編）(2014).　大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学　ナカニシヤ出版

Uhlik, M. (2008). Simmering in the Soviet pot: Language heterogeneity in early Soviet socio-linguistics. *Studies in East European Thought*, 60, 285-293.

ヴィゴツキー , L.S.　柴田義松・森岡修一（訳）(1975).　子どもの知的発達と教授　明治図書出版

ヴィゴツキー , L.S.　神谷栄司（訳）(1989).　子どもの心理発達における遊びとその役割　ヴィゴツキー , L.S. ほか. 神谷栄司（訳）　ごっこ遊びの世界：虚構場面の創造と乳幼児の発達　法政出版　pp.2-34.

ヴィゴツキー , L.S.　柴田義松（訳）(2001).　思考と言語　新読書社

ヴィゴツキー , L.S.　広瀬信雄（訳）・福井研介（注）(2002).　子どもの想像力と創造　新読書社

ヴィゴツキー , L.S.　柴田義松・森岡修一・中村和夫（訳）(2004).　思春期の心理学　新読書社

ヴィゴツキー , L.S.　柴田義松（監訳）(2005).　文化的-歴史的精神発達の理論　学文社

ヴィゴツキー , L.S. 土井捷三・神谷栄司・伊藤美和子・西本有逸・竹岡志朗・堀村志をり（訳）(2012).「人格発達」の理論：子どもの具体心理学　三学出版

Wertsch, J.V. (1985). *Vygostky and the social formation of mind*. Cambridge: Harvard University Press.

＜付記＞

本論文の執筆に際し、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究（B））「大学生の共創的越境力を促進する教育方法・評価法の効果に関する実証的研究（代表者：田島充士・課題番号：26780353・平成 26 年採択）」の助成を受けた。

＜謝辞＞

本論文の執筆に際し、多くの助言をいただいた早稲田大学・桑野隆先生、京都橘大学・神谷栄司先生、University of Sheffield・Craig Brandist 先生、そして私を研究者として育てていただいた筑波大学・茂呂雄二先生に対し、深く感謝致します。